

都留市史

資料編

古代・中世
近世 I

三〇 初雁（狩）五郎の狼藉

建武四年（三三）七月

奉進 柏尾山

甲斐国小岡郷内上野小七郎并跡

塚原同人事、合田畠六町余跡

右為_ニ御敵初雁五郎当寺炎上_ニ之

間、不_レ退_ニ行法_一、令_ニ陵遲_ニ之者也、仍為_ニ

（足利尊氏）將軍御祈禱_一、寄進如_レ件。

建武四年七月十六日

（斯波家長）
陸奥守（花押）

柏尾山衆徒中

（東山梨郡勝沼町 大善寺文書）

【解説】 北朝建武四年は、まだ室町幕府が形を整えつつある段階で、動乱の最中である。この史料は、柏尾山大善寺（勝沼町）がおん敵初雁五郎によって炎上せしめられたのを、足利尊氏が戦勝祈禱のために同寺再建の料として、小岡郷（山梨市）ほかの田畠六町を寄進する、というものである。尊氏は正確にはまだ征夷大將軍に任官していないが、すでに公の立場から寺社の保護再建者を名告っている。初雁五郎については、関連する史料は残されておらず、その活動についての伝承も残されていない。わずかに初狩の連野に城館址の伝承はあるが、判然としない。初雁五郎は、おそらく荘園内の悪党的な下級荘官であったと推定される。

この時期尊氏は、幕府を公権力として天下に認めさせることに腐

心しており、十月には全国的に、武士方の占領した寺社・国衙領の返還を命じている。

なお大善寺は、古代の峡東地方の譜代の名門である三枝氏を檀越として、平安時代に成立した名刹で、現在国宝となっている本堂は、この時期の再建である。